



## 現在の廣峯神社



## ＜交通アクセス＞

J R・山電の姫路駅から神姫バスで競馬場前まで約20分  
競馬場前バス停近くのタクシー会社からタクシーで約10分  
鳥居前から境内まで徒歩約10分  
増位山隨願寺駐車場から山道を徒歩で約30分

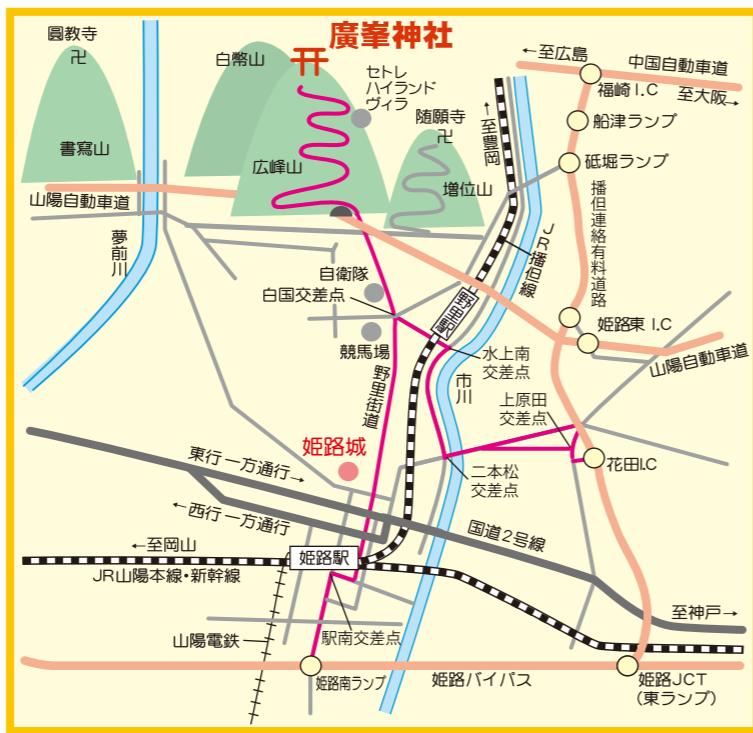
国指定重要文化財

牛頭天王總本宮

# 廣峯神社

姫路市広嶺山52

079-288-4777



かんべえくん

# 軍師官兵衛と



黑田官兵衛



荒木村重



明智光秀



竹中半兵衛



織田信長



# 廣峯神社物語



廣峯長職



定伊橋櫛



# 徳川家康



# 廣峯神社略記

弥生時代、崇神天皇が国を治めていた今よりおおよそ二千有余年の大昔に、素戔鳴尊と五十猛尊を白幣山に祀ったのが当社のはじまりです。

社伝では、神功皇后が三韓征伐に出兵する途中、この地に寄られ白盤山に登り、素戔鳴尊に皇軍の勝利を祈ったとあります。

そして、三韓の平定に成功すると、帰国する際に再び白盤山に登られ、感謝のお祭りを行い、小宮を建立されたと伝わっています。

奈良時代、聖武天皇が国を治めていた天平5年（733）、遣唐使であった吉備真備公が帰朝する途中、素戔嗚尊の神託を受けられ、その旨を天皇に奏上し、翌年、白幣山に社殿を建立して廣峯神社と称しました。

また、真備公は唐で学んだ陰陽道を世に広めたいと考え、主祭神である素戔鳴尊を牛頭天王・武塔神に、奇稻田媛命を頬梨采女・歳徳神に、天照大御神との誓約で誕生した八王子の神々を八将神に配して、こよみを司る日本の暦神としました。

このことから廣峯神社は陰陽師たちが崇拝する聖地となっていました

平安時代、素戔鳴尊の御子である天津彦根命の後裔で、宮廷歌人・官人でもあった凡河内躬恒が醍醐天皇の勅命によって祭主となり、その子恒寿が廣峯大別当に任せられ、廣峯の姓を賜ってより明治に至るまで、代々にわたって大別当職（宮司）として神社に奉仕しました。

この大別当職とは、最高の神主であると共に、神領内の警察権をもつ惣追捕使・下司・公文・地頭や庁直職も兼ねていました。

えんゆうてんのう  
円融天皇が国を治めていた天禄3年（972）、白幣山から現在地にご  
本殿を遷座したのが、今の廣峯神社です。  
ごしらかわてんのう  
りょうじゅんひしお  
後白河天皇の編纂された『梁塵秘抄』には、関より西の軍神、一品中山、  
安芸なる巖島、備中なる吉備津宮、播磨に廣峯惣三所、淡路の石屋には住  
吉の宮とあるがごとく、播州はもちろん朝廷でも広く尊崇されていました。

その後、廣峯勝賀は神主でありながら鎌倉幕府の御家人にもなった偉人で、武士としても大活躍し名声を高めました。

その孫の長祐は京都大番役という大役を務め、4代後の貞長は廣峯城城主となりました。

鎌倉時代、廣峯神社は大変ご利益のあるありがたい神社として全国に知られるようになり、播磨国は言うに及ばず、他国からも崇敬のあつく我もわれもと道を争うように参詣し、その有様は紀州の熊野詣にも劣らないほどであったと、当時の様子が『峰相記』に記されています。

その信仰圏は、畿内の一部、山陽道、山陰道の丹波・丹後・摂津・但馬・因幡・美作・備前・備後まで及び、一地方の神社としてはありえない規模にまで膨らんでいました。



# 黒田家三代

黒田官兵衛の祖父である重隆は、備前福岡で仕官することも叶わず、牢人のまま家族を連れて播州姫路に移り住みました。

そこで、手柄山の東側に居を構えていた廣峯神社の社家に出会い、その勧めもあって播州で評判の廣峯神社（廣峯城）に参拝します。

この時代の参拝の有様は、山頂まで登ってから神社周辺に点在した社家（御師）屋敷に寄って一息つき、それから社家の主に案内されてはじめて本殿に参ると言うのが一般的でした。

このときに出会った社家たちと仲良くなつた重隆は、仕官の道を探すため度々廣峯神社に参拝し、顔を知られるようになりました。

そして、重隆との会話からその知識力や聰明さに驚き、人柄を気に入った社家たちが重隆を助けたいと思い、黒田家秘伝の目薬を神社の御札と一緒に配りたいと申し出ます。この目薬は農家の人々に評判が良く、大量に売れたことから黒田家はたちまち財を成しました。

その資金を当時としては破格の低金利で農民に貸し、その代わりに黒田家に奉仕する人を集め、家来を三百人程も抱えるようになりました。牢人の身であった黒田家がようやく武家らしく身代を構えられたのです。

この話が社家たちより廣峯神社の大別当職であった廣峯長職へと伝わったことで、良き人物がいると長職の実兄で御着城城主・小寺政職へと紹介され、小寺家に仕えることとなり長年の夢が叶ったのです。

重隆が隠居して入道となり息子の職隆が家督を継ぐと、職隆を大変気に入った小寺政職は小寺家の養女を娶らせ義兄弟となりました。さらに自分の身内であると言うことから小寺姓を名乗らせ家老職に就かせました。また御着城の出城であった姫路城城主に任命しました。

室町時代、天文15年11月29日に、黒田官兵衛孝高(よしたか)こと萬吉が姫路城で誕生します。

子供のころの官兵衛は、増位山隨願寺の近くにあった地蔵院に住まいする叔父の小寺休夢の所に出かけては歌や学問などを学んでいました。

また、休夢が廣峯神社の社家（御師）たちとも親しくしていたので、官兵衛も一緒に廣峯神社によく訪れていたのではないかでしょう。社家たちから様々な他国の話や陰陽道の話を聞くのは楽しく、そのつぶらな瞳を輝かせていたことでしょう。

官兵衛が成長して父のあとを継ぐと、政職と長職の妹が嫁いだ櫛橋家の娘である光姫を妻に迎え、松寿丸（長政）が誕生します。

官兵衛自身のもって生まれた才能に、子供のころから廣峯神社の社家たちから得た様々な情報によって、後に出会う秀吉からも怖れられた軍師としての素質を高めて行ったのではないしょうか。

